

平成 29 年 11 月 22 日

総合教育会議 会議録

長岡市

1 日 時 平成 29 年 11 月 22 日 (水曜日)

午前 10 時 00 分から午前 11 時 40 分まで

2 場 所 アオーレ長岡 第二応接室

3 出席者

市 長 磯田 達伸

教 育 長 高橋 譲 教育委員 鷺尾 達雄 教育委員 羽賀 友信

教育委員 青柳 由美子 教育委員 大久保 真紀

4 職務のため出席した者

教育部長 金澤 俊道 子ども未来部長 波多 文子

福祉保健部長 小村 久子 教育総務課長 曾根 徹

学校教育課長 竹内 正浩 子ども家庭課長 大矢 芳彦

学校教育課主幹兼管理指導主事 神林 俊之 学校教育課指導主事 斎藤 豊

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐 星野 麻美 教育総務課庶務係長 佐藤 裕

6 会議の経過

(金澤教育部長) 平成 29 年度長岡市総合教育会議を開催する。まず、会議を主催する磯田市長から、あいさつをお願いしたい。

(磯田市長) 平成 30 年は長岡開府 400 年の節目となる年であり、長岡の未来を担う子どもたちのために何ができるのかを考えているところである。まず、子どもが長岡に定着、もしくは県外に行った子どもが帰ってくる街にするため、長岡版のイノベーションに取り組み、働く場所をつくりたい。そして、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、子ども達にスポーツのすばらしさを伝えたい。地域のスポーツ活動が盛んになっているが、学校現場では部活動のあり方が大きな課題になっており、子どもたちを指導する人材を確保していきたいと考えている。

また、経済的に困窮している世帯も増えているため、貧困の実態を踏まえて、子ども達への対応を考えたい。今後の政策方針の示唆となるような活発な議論を願う。

(金澤教育部長) 本日の議題は 2 つある。「部活動指導のあり方」と「子どもの貧困対策」についてである。これからの議事進行は、市長に願う。

(磯田市長) テーマ 1 部活動指導のあり方 を議題とする。事務局の説明を求める。

(竹内学校教育課長) [資料に基づき説明]

(磯田市長) 市内の部活動の現状について説明を受けたが、この内容を踏まえて今後の部活動指導のあり方や外部指導員の導入について意見を願う。

(高橋教育長) 資料は、長岡の部活動の顧問へのアンケート結果及び中学校校長会との検討の内容をまとめたものである。部活動の問題は、長岡だけの問題ではなく全国共通の課題となっている。スポーツ庁は、中学校及び高校の公立・私立学校の顧問、生徒及び保護者に対してアンケート調査を実施し、先日概要を発表した。内容は「校務と部活の両立に悩んでいる」「校務の関係で部活動の指導が思うようにできない」「休息がとれない」が 5 割前後で、長岡とほぼ同じ傾向であった。子ども達へのアンケートでは、部活動の時間が長いと感じている生徒は 2 割、保護者は 1 割強であった。教員は忙しい状況の中で学務や部活動を行っているが、子どもや保護者からの学校への部活動に対する期待は高いことがわかった。また、教員の 3 割は、地域で担える部活動種目については将来的には地域で指導を担ってほしいと

いう意見であったが、保護者の4割は、できる限り今まで通り学校で指導してほしいという意見であった。国が外部指導員の導入の検討を始めているが、学校側の意見だけではなく、子どもや保護者の理解を得ながら進めていかなければならない。

(磯田市長) 質疑、意見はあるか。

(鷲尾委員) 部活動で情熱的に子ども達を指導している先生は、大変魅力的である。子ども達からは尊敬され、親とのコミュニケーション能力も高い。部活動を通じて出会った先生の影響で教師を目指した人は多いはずだ。自身の感動経験を子どもたちに伝えるために部活動に一生懸命に取り組んでいる先生も多いと思う。部活動を通して人間教育に取り組みたい先生には校務の補助を、部活動を負担に感じている先生や部活動の指導が苦手な先生には外部指導員などの技術指導の補助をするような、部活動の負担軽減だけではなく、校務の負担もサポートができる体制があれば、必要な補助ができるのではないか。

(青柳委員) 勉強が苦手でも部活動が得意な子どももいる。学校による部活動指導を望んでいる保護者は、子どもの様々な姿を先生に認めてほしいと願っているのではないか。教職員の負担軽減、部活動の成績を向上させるなど、部活動のこういった側面に重点を置くのかで対応が変わると思う。外部指導員を導入する際には、実情に合わせた対応が必要になる。

(大久保委員) 先生が保護者対応に負担を感じている現状があるが、外部指導員を導入しても、その負担はあまり変わらないのではないか。保護者の意識や理解を深める必要がある。

(羽賀委員) 部活動を力を入れている先生は、自分の家族と過ごす時間を部活動の指導にあてており、家族の負担があるはず。部活動の指導は家族の理解がないと難しい。

(金澤教育部長) 部活動の顧問は、競技経験など専門性の有無で指導力に差が出る。経験の無さから指導に悩んでいる顧問もいる。しかし、保護者にとってみると、例えば、リトルやシニアで野球を続けようとする、子どもの送迎といった時間的な負担に加えて、相当の費用もかかるため、家庭の負担が大きい。部活動は親の手を離れてスポーツを楽しませることができるため、一生懸命な顧問のもとで子どもに部活動をさせられるのは、保護者にとっては喜ばしいことだ。

(磯田市長) 技術指導のできない教員が部活動の顧問をしている場合に、保護者からの不満はないのか。

(神林学校教育課主幹兼管理指導主事) 競技経験のない顧問が、いいチームを作ることもある。競技力を上げてほしいのか、部活動を通して子どもの人間力を磨いてほしいのかなど、保護者の期待がどこにあるかにより、様々な意見がある。

(斎藤学校教育課指導主事) 競技経験がない若い先生は技術指導に不安を感じているため、専門指導者がいると助かるという意見もある。技術指導は専門指導者、先生は顧問として生活指導面の指導にあたることができる。

(高橋教育長) 教員だけでなく、保護者も考えが違う。さらに子どもたちの技術レベルや部活動に対する考えも違うことから、一律に外部指導員を導入するかどうかではなく、まず必要な学校に導入し、外部指導員による部活動指導にはどのような支障があるのか、また、その支障を改善するためにはどうしたらいいのか、議論を重ねていく必要がある。

(青柳委員) 保護者も部活動に関する考えを柔軟にしなければならない。学校の部活動に対する考え方に応じて、導入の検討を進める必要がある。

(大久保委員) 外部指導員はどのような人を想定しているのか。

(金澤教育部長) 当初は、スポーツ協会やスポーツ関係団体等を考えていたが、部活動の指導は夕方や土日が中心になることから、全てこの団体から選出することは厳しいと考えている。これから退職する教員の中で、部活動に熱心な人も人材として想定し、学校での部活動の意義や大切さを理解した専門性の高い人を確保したい。

部活動は、子どもを育てる場としてとても大事である。しかし、現在の教育現場は様々な課題があり窮境としており、部活動の指導が負担となっている教員もいるため、何らかの手立てを講じる必要がある。部活動は子どもたちがそこで何を学ぶかが重要である。保護者にも部活動の意義を理解してもらう必要がある。

(青柳委員) 武蔵野市では、大学生を活用してうまくいっている事例がある。大学生にとっても、部活動指導を通じて子どもへの指導方法や教育現場の状況を学び、体感できる場となっていたようだ。

(磯田市長) 校務が多忙で、専門的な知識がない教員が顧問となり、大変な思いをしているこの現状は外部指導員の導入で解決されるのか、また、導入することでも

のような影響が出るのか、まずは試験的に活用したらどうか。

[「異議なし」と呼ぶ者あり]

(磯田市長) テーマ2 子どもの貧困対策について 事務局の説明を求める。

(大矢子ども家庭課長) [資料に基づき説明]

(磯田市長) 質疑、意見はあるか。

(高橋教育長) 貧困の子どもたちは、推計で1クラス35人中5人が該当する。今後、本格的な実態調査をする予定であるが、子どもの貧困はなかなか気付きにくいものだと理解している。教員経験者は、この実態をどのように感じているのか。

(金澤教育部長) 相対的貧困は表面に現れにくい。担任は、就学援助の受給状況などで子どもの家庭状況を把握している。

(高橋教育長) 家庭の年収状況は学校では把握できないのか。

(金澤教育部長) できない。

(斎藤学校教育課指導主事) ひとり親の家庭数が年々増えてきているのは実感していた。しかし、子どもの様子から家庭の貧困状況を察することは難しい。衣服が他と比べて違ったり様子が違う訳でもなく、元気な子どもも多い。

(高橋教育長) 子どもの貧困に気が付かなければ、様々な支援制度があっても、そこにうまく繋げることができない。

(羽賀委員) 既存の制度と情報が繋がっていなければ、支援制度は機能しない。繋げる仕組みがしっかりしていないと、対策を考えても空回りする。

(青柳委員) 地域の見守りを強化して情報を共有するために、民生委員と連携できるといい。

(磯田市長) 福祉では、本人の了承を得たうえで、健康情報や福祉情報について、フェニックスネットを使い関係者が情報共有している。路上で倒れた高齢者を名前で検索すると、かかりつけ医や服用薬もわかるという全国でも数少ないシステムである。

(鷲尾委員) マイナンバー制度は、全ての個人情報を一元管理することが目的である。韓国では、マイナンバーを活用して各家庭環境にあった医療制度等を照会する社会が実現されている。目の届かないところにサービスを提供するために、情報管

理するのはいい。

(小村福祉保健部長) フェニックスネットは、医師会、薬剤師会等の専門職や福祉専門職等と連携をして、高齢者に何かあった時に、かかりつけ医、病気、服用薬、介護担当等の情報を関係者が共有できるシステムである。

(磯田市長) 子どもにもシステム導入は可能である。どのようなケアができ、サポートができるかがすぐわかる。もし、導入に抵抗があるのであれば、理解を得ながら連携して取り組むことが必要だ。

(大久保委員) システムを導入しても、金銭的支援が子どものために使われていない問題や、貧困、不登校などの問題は解決されない。また、先生が多忙で、子どもの状況に気付いたとしても手を差し伸べることができないことがあるのではないかな。

(磯田市長) 子どもの貧困は必ずしも世帯収入によるものでだけではない。保護者の浪費、ネグレクトや家庭内暴力などが原因の場合もある。

(金澤教育部長) 経済的に貧しい家庭でも、頑張って子どものためにお金をかけている保護者はいる。家庭の困窮と子どもの貧困は同じではない。ただ、家庭に金銭的な余裕がなければ、十分な子どもの養育が難しいこともあるため、福祉的な支援は必要だ。子どもが困って苦しんでいる部分にどう手を差し伸べるかが大事だ。

(磯田市長) 長岡市に、経済的な理由で朝食を食べることができない子どもはいるのかな。

(高橋教育長) 長岡市の実態では、学校に朝食を食べてこない子どもはほとんどいない。

(磯田市長) 貧困の連鎖を断つためには、高校・大学進学への支援や学習支援も議論にあるがどうか。

(金澤教育部長) 子どもにかかる教育費が家計に占める割合は大きい。家庭の収入が低いために自己肯定感が低く、自分の将来をマイナスに見てしまうことが子どもの貧困だと考える。収入が少ない家庭へのサポートがあると子どもの将来が広がる。

(磯田市長) 国の動きとして、教育費の無償化の制度が進められるが、貧困層への支援は現在どのようなものがあるのかな。

(大矢子ども家庭課長) 福祉施策として貧困世帯の学習支援事業に取り組んでいる。

(磯田市長) 何人が支援を受けているのか。

(大矢子ども家庭課長) 現在は5名である。

(磯田市長) こういった特別な補習について、学校現場はどのように思っているのか。

(金澤教育部長) 小学校では、貧困に限らず、学習の定着が低い児童には、残って補習をすることが多々ある。中学校では、部活動があるため残って補習をすることは少ないが、テスト前の部活動が無い期間に補習を実施することはある。

(磯田市長) ひとり親世帯の貧困率が圧倒的に高いが、ひとり親世帯への支援はどのようなものがあるか。

(大矢子ども家庭課長) 生活支援課に児童扶養手当制度がある。受給者には、就労支援だけでなく、資格取得の支援や医療費の助成もしている。

(磯田市長) 母子家庭で、正社員としてフルタイムで働いている人は多いのか。

(大矢子ども家庭課長) 児童扶養手当は、親世帯と同居をしていても受給できる制度である。そのためフルタイムで働いている人も多いが、母子のみの家庭では少ないかもしれない。

(磯田市長) 今後も離婚率が高い傾向が予想されることから、福祉政策として母子家庭・父子家庭に手厚い支援は必要である。教育委員会が今後取り組む施策はあるのか。

(高橋教育長) 地域の方々と一緒に、子ども食堂を実施していきたい。現在、様々な支援制度を実施しているが、この支援制度を利用できない家庭や子どもには、他部局と連携しながら、しっかりと周知をして対応したい。子どもの貧困については、平成30年に本格的な調査をする。その調査結果を踏まえて、新たな施策を考えたい。ただし、目の前で困っている子どもには、直近の問題として素早く対応する。

(磯田市長) 子育て支援全体で考えると、貧困だけではなく各家庭で様々な問題がある。実態調査後に新しい対策を考え、継続して検討していきたい。

(鷲尾委員) 実態調査はどのようなものを考えているのか。

(大矢子ども家庭課長) 県が実施した実態調査の内容をベースに、長岡市の実態を比較して把握できるものとしたい。また、県の調査では見えない部分も把握したいため、質問内容を検討しているところである。

(高橋教育長) どのような方法で調査を行うのか。

(大矢子ども家庭課長) 個別の調査票によるアンケート形式を考えている。

(羽賀委員) 5・6年生の居場所が無いという意見を聞いたことがある。孤立している子どもの集まる場所があれば、心の貧困から救えるのではないか。

(磯田市長) 学校だけが子どもの居場所ではない。学校だけでなく、社会全体で子どものために何ができるか考えたい。昔は空き地や神社など、子どもの居場所があったが、現在は居場所が減ってきている。目的がなくても集まることのできる場所、または、ロボコンなど友達と一緒に何か取り組むことのできる場所などを提供してあげたい。

最後に、長岡で育つ子どもをどのように育てたいか、言葉で明確にしてはどうか。街全体で子どもを育てるイメージを言葉で表したい。「熱中！感動！夢づくり教育」は、子どもの意欲をかきたてる有効な手段である。さらに充実させてほしい。本日は大変有意義な会議となった。感謝する。

(金澤教育部長) 以上で、平成 29 年度長岡市総合教育会議を終了する。